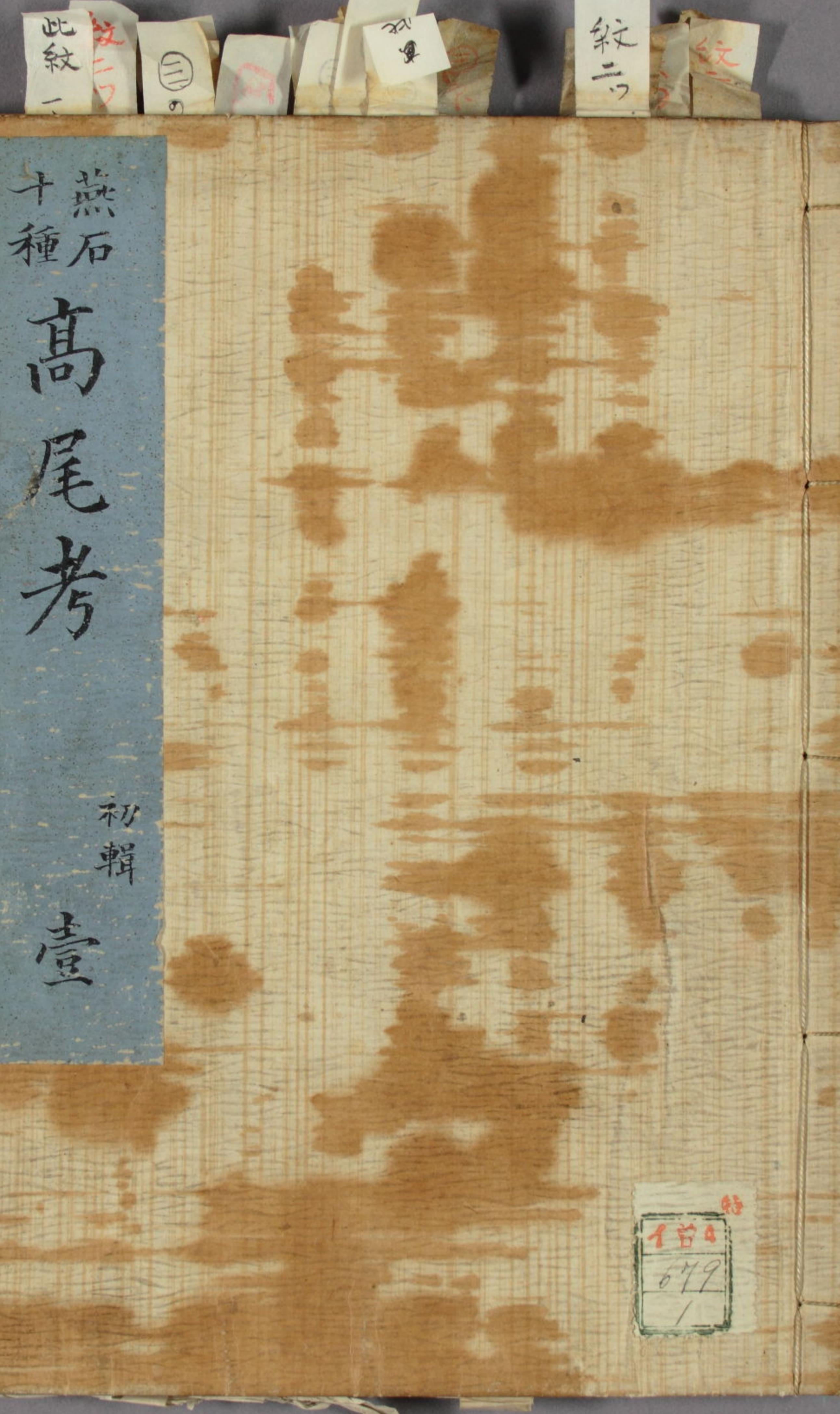


9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

JAPAN



印曾四
679
1-1

紋二つ

二字下り 高尾考 一
高尾七代之事 4
初代高尾
仙墓森々立す もれを略す 法名傳譽妙順と云ふ此道哲

四字下り 小墓あり

二代同高尾 5

紀伊守納言徵古家康亨立石碑記 以最上吉方と云ひの清也一紀伊守

一法毛ひく是をさい上吉尾と云

四字下り

三代同高尾 6

水戸守相殿為勢而用達 水谷六義鶴うけゆ後玄蕃右馬御下人平左衛門
と云ふ十八歳ある男と不貞を出奔をそのちまたままでやうんじ
妻とする宇摩牧野銀河也と妻を公ふゆく中小姓河野平馬と出奔に
そば深川の板橋筋の女房みありそれより後者袖岡源三郎女房となる

此紋一

文二

三

四

五

六

又三河阿元猪油賣比類無^{アリ}あり。ある附大おんち。あの猪食尾と以葉

四字下リ 原のあふきうりもあれ死を是を水谷家尾と云

四代目玄尾

四字下リ 三万石浅野幸政は清也を是を涉野家尾と云

五代目高尾

細庵九郎吉萬清也を四代目があるらう。まゆを革スルもとの外

やく心をもひをみて。湯の者人の裏アヒとある。ばづからぬ生れのよ
し高木家九郎吉萬は是を阿^{ハシ}ト^{ハシ}行^{ハシ}き男を脛もくはるひ。や様眼アヒをこ
此か醜男アヒトしよ^{アヒト}あし活也アヒトて道も中むづく。草^{アヒ}とす。とす。九郎吉萬

湯をめ小毛アヒをあぶた湯アヒと人をもひひひ。しゆえ是アヒをだら家尾と云

六代目玄尾

拾五万石柳原式教大輔清也は式教大輔隱居アヒ付越後國家尾の候

被

跡

三

手

三

手

拾五万石柳原式教大輔清也は式教大輔死の後尾アヒは世を承ひ。附前主

四字下リ 病死

紋二フ

七代目玄尾

竹^{アヒ}結出^{アヒ}をと^{アヒ}事^{アヒ}をきり。年^{アヒ}ケ^{アヒ}出^{アヒ}。近^{アヒ}木^{アヒ}大^{アヒ}根^{アヒ}參^{アヒ}。

水^{アヒ}家^{アヒ}の女^{アヒ}あり。しをそ^{アヒ}のま^{アヒ}か^{アヒ}。まほい^{アヒ}めりし^{アヒ}。

右^{アヒ}通^{アヒ}家^{アヒ}尾^{アヒ}を七代^{アヒ}を継^{アヒ}。上^{アヒ}家^{アヒ}尾^{アヒ}の出^{アヒ}。人^{アヒ}を病^{アヒ}のみ

右^{アヒ}ハ^{アヒ}當^{アヒ}吉原^{アヒ}大^{アヒ}黒^{アヒ}舞^{アヒ}。左^{アヒ}ハ^{アヒ}當^{アヒ}吉原^{アヒ}草^{アヒ}摺^{アヒ}引^{アヒ}。

一ノ

引^{アヒ}用書目

○吉原草摺引

○吉原大黒舞

○新吉原細見圖

下字三十リ 元祿七年板

寛永六年板

享保初板

享保十三年板

上字四

此紋一フ

文

此紋
文
紋二
紋二

兩巴危言
吉原細見
吉原志家位名見
吉原の花
吉原細見
吉原枝の花
吉原花橘
吉原細見
吉原志家位名見
吉原細見
吉原志家位名見
吉原細見
吉原志家位名見

享保六年板
元文四年板
寛保元年板
延享四年板
寛延四年板
寶曆七年板

上字四

五字下り
己上ノ書ヲ抄出シテ左ニ列シ愚按ハ。ヲ加ヘテ是ヲ分ツモノアリ
吉原草摺引卷一
太夫
六字下り
格子
小柴ふるのうらうを意のつり
作者鈴木氏草
黄表紙中本六冊
十三字下り
行アキ
行アキ
行アキ
行アキ
三浦四布左
三浦四布左
五衛門
五衛門
評鑒
評鑒
評鑒
評鑒
評鑒

二字下り
序ナリ
元禄七年板
吉原草摺引卷一
太夫
六字下り
格子
小柴ふるのうらうを意のつり
作者鈴木氏草
黄表紙中本六冊
十三字下り
行アキ
行アキ
行アキ
行アキ
三浦四布左
三浦四布左
五衛門
五衛門
評鑒
評鑒
評鑒
評鑒
評鑒

左支

高雄
もみちを
ひろのづき
やゑ

評鑒

三浦四布左
龙衛門

龍衛門

紋二

は君せいをこちひきとどもどうりんてもすまほせふりあそにちうき
ひうでたうきのやうかがうきとほされへおそぐにこのきみさきやくふよ
てきけをうあくばまくひそくふかんくみかけそりと、よりぬごきいくよへ
きやくらうきのつづきをよみとへかうのよありのちくちくふん
うひのきくわうときよみくなれいわいと、やくもやもゆくま
すかんあいのきをうちねとよりかけくをうけむけのすきをくはきくま
ももいきくまくはく、ハジのゆめうきすもかんあいのすとくもくあ
おあくすくのをひらうもくくぬをものをもくまく、うがあれも
まうぬもの今ハおうゑのかたへゆきしてうわれもおをほをほころもくま
めれりくまくとくまくをとくまくをとくまくをとくまくを

ウ・マル△

ま

一 行 卍キ

按此時高尾ナシトミヘタリ

次

京町 三浦 四席な

玄 まうすくも

評 晴

やりて
むく
まらよ

塔子 いま 小もつき

評 晴

京町 三浦 四席な

ワ 一のあ

評 晴

京町 三浦 四席内

かくのことくつきて今高尾アサヒ 然きハ仙墓高尾
比年ハ万法年中のことあれハ中疏シテ おもてすを尾モモセ

寶永六年己丑秋 武陽 豊嶋郡真土山之住作者流宣

吉原大黒舞云 黃表紙横本

江都書林

松野 宇ちろ
秩父吉き間
古屋左多衛

四字下

紋二つ

高雄

太史

二字アキ

京町 三浦 四席左の内

アラモチハチノウ百九代ごやうせんりの御宇度七のむく、源城の都ふふ
里て河内の波多のま東廢ゆきもおとあきれが花のかほ戸の道をくへ武家
ひやく善つゝ一民の町ある美をほくもふ成毛里を柳町よりたてちん高
うのまことさくもうもひやう吉野三浦が玄尾とおまの名を一大ふく、
やうし萬人れをゑつゞいまの音をうづりれども玄尾の名代くつて
き六代の後流小三浦の介高雄アサヒ とて嶋あ新町をきあくはまよおひそへ
一貴富千 奉よりまよて容態うるわしくみをもひあひでけくう物う
そをよ心をうく情をあうて諸薦あらわして久くまよあ日暮の茶
のゆをうのえみ夕ゆの琴をあうて三味とうの名あふ

此紋

文

一

ワ 人 い

按スルニ此高尾仙臺高尾ヨリ三代目ナルヤ四代目ナルヤ不審且
此書ニヨレハ柳町ノ比ヨリ高尾アリ

一 宅

一行印

二字下 享保 年板
吉原丸鑑 云
武州真土隱者 蝶即
然らん享保ノ始の板あり一ホノをふるひ板元も不詳
青志院の中横板也

二字上

京町 三浦面四布左内

二字下 四字下
極上一吉 太支
高尾 定紋丸の内相の葉

皆も一是ハ元祖家尾より九代の後流かすがなをあひと云せきのあうたと
出一君はさきをひく西候五年ふ出でてを更の位ふ持る。あすと
やまの内は如希三子の萬人あをとみをこもれ。すすいひまに
もま十道中の義をいわきいまざうそなよ。滿月の雪あだ室をの
くがと一宿つきのまよひもとむたるち更幸く。頭が足をきをも
極上にせきとひまくおうもきよけもひやくもひ一月よきひす

紋二つ

氣かもふとへかすあねども星氣かもあらみにいたることも叶ひふのみだ
多うめをかすへあへ。かくがゆへありあれたまへかといひものやうへ
よくうるひをもひうるひうるひ音曲たへるがとどまなまうるひ
あうさればゆくれん全くへり。細し酒まくぬおたへあみあらじもれつま
ヒトテヘおゑもかくとき唇をすへたりのうへまも心をかく角を笑
鳥をつるきうるをありす笑鳥をたとえり。东风溫和の氣をうけて
桜花を下りてかくがと一折みくわゆもとある客のと呂翁。かくあり
くふきひうやき。今く物あらむひあす。画すへたけ。とき。鳥のみがんもあ
くねうねはせ。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。かく。
媚娘たままもまくふあみをうへて。よそちひ梨花一枝画を常ある
をいふもろく。比楊貴妃の位歎かすひ。すまぬ。深あほほ。とふ
み。人の毛。弓と。ども。ちゆ小ち尾と名付。きこの代一人。と。と。と。
と。ある。重人ふげ。されば。は名を残す。行。まほ。は里。や。の。石。と。の。あ。ゆ。を。

此紋

之

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

三
二

二字

寛保元年酉板

鴛ノ思羽

細足之

品	井	太夫	八十屋	庄者持
一 教葉	井	格子	六十女	八郎尾持
一 文一介	井	昭出	平十女	X 十郎公
四 茄局	井	吉田	大五	太夫
・ 茄局十八枚	井	吉田	大五	八十屋

每月改不
大德寺
提金屋八屋
松屋
大五
大五
山中九十九

7

京町一丁目	中町下うへ	之浦に布左右
井	上まき	井
井	あつも	井
井	さづまち	井
井	ひとへ	井
井	よし	井
井	とめな	井
井	玉	井
井	きま	井
井	まき	井

手尾アリ
此細足黄表紙之

延享四年板



京町壹丁目 中ノ丁の右うへ	之浦に布左右	中町下うへ
か	か	か
くす雲	くす雲	くす雲
合	合	合
三浦	三浦	三浦
四郎左右	四郎左右	四郎左右
日	日	日
又セの	又セの	又セの

板元鱗形
唐春紙高銀之
は付
手尾ニナシ

寛延四年板

細見原被比花

此改社賣所

新考家原町
大和高尾

元

社

金

9

京町壹丁同	中丁右	右	三浦	弓	左	ら
左	右	上	下	左	右	上
右	左	上	下	右	左	上
上	下	左	右	上	下	左
下	上	右	左	下	上	右

目序
二字行

10
百

按此改社ニ大ニ浦ノ家衰テさんちやバカリアリ
高尾ナシ且此細見唐紙表段模也

寶曆七丁五年板

吉原花橘云

此
改社
賣所

新考家原町
大和高尾

本

金

12

本
金

京町壹丁同 中丁右
弓 平 七

三

高人本

○按此頃已ニ大ニ浦ノ家断絶セシトミヘタリ 明キテ家名ナシ

高人本

且此細見モマタ唐紙表紙横本也

按三浦屋玄尾仙臺玄尾ヲ以て初代トスルハ非ナリ宝永
吉原大黒舞ニヨレバ此毛里を柳町トドリ多て玄尾ナリ
の事と云ふ一ノ字もみやが者暨三浦が玄尾と云々史
比名を一天よりかやう一ト略是之ヨリ玄尾有ル必セリ又元
禄七年)吉原大黒舞ニ玄尾今ハおやどさるの子ヘゆき
てト玄舞トアリテ因書て此居姓いをこゝちづきとソとも
だうもも玄舞あくそありゆゑとてちきこうもと
うきのみひらきすととくまされ~~ハ~~ハおて~~ハ~~也ト略
トアレバ元禄ノハジメ高尾アリニナルベシ且宝永ノ吉原大黒
舞ニ古代ノ高尾トアリ享保ノ吉原丸禮ニ元祖玄尾より
九代の後胤トアリ是え祖玄尾ヨリノ代ナルヘシ全原盛和
か口授スル所ノ高尾ノ中何代ニアタレルヤ未詳

二字上

天明丁未季秋廿八日 巴人亭主人戲書

三浦屋

般別

附錄

三字下

三浦屋内二代目高尾古墳之譜

瀬名氏源貞雄誌

二字上

江戸砂子江戸麻子あふ記~~は~~ニカムヒ道哲~~は~~三浦屋内二代目玄尾~~は~~碑
行方治三年傳~~は~~妙心信如と清正~~は~~たすく~~は~~やつ~~は~~道哲~~は~~ま
足を量を及ぶ~~は~~清正の文字御字を遺~~は~~り左に圖を~~は~~む

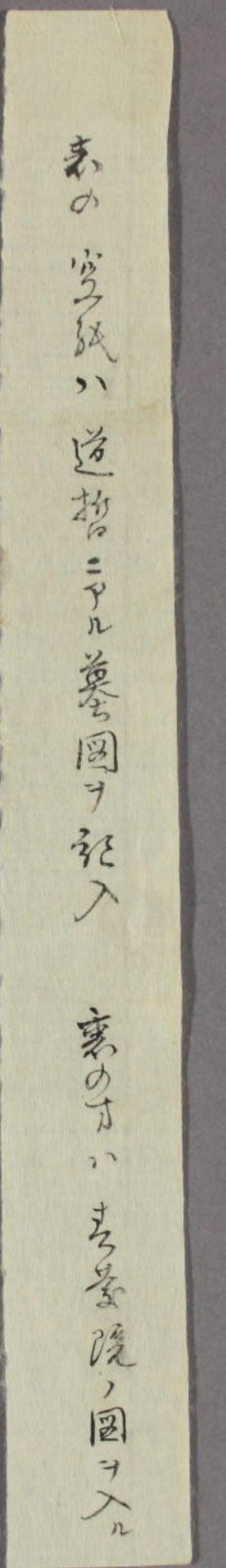
通(因~~は~~るす)二字上

6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30

JAPAN
Takata

東の宮城ハ道替ニアル幕圖ヲ記入

東の方ハ幕張院ノ圖ヲ入ル



如斯ありてもふの爲めに書く事あることの碑を何處に移參め
身の碑ハ湖岸ニ谷町春慶院より四面塔碑あり万治年中伊達綱宗
之尾を敵害されを去佐原比津福院小造りてそば時行上をみゆるよ
ぐにて哲よりうたり碑ありと云ふ事あひて重きニ谷町春慶院
ありて尋ねる所かのはあるふやもたがちに古碑ありて左ニ書圖を

ノ

（因田卷す）

如前万治二年三月五日と見道塔碑より万治三年三月廿九日と見
オモカ
サシ

雄と云傾城立直継と死する事の如くとも法名釋世の句を因一念の事の
行えきや行き一方ハ猶作せしものあん偏か是ハかの爲う候る事も後年
淨福院より無形化を多様がうきうき行きへて正覺院とありまつてを
造りて世を下す傾城立直継の筆を遺せんも造てあるとめあるとぞりとも有
慶院の誠の妙身の碑如此埋れてもあがまく道塔の虚妄の碑を以て
砌るはア鹿子等かあるとぞり世人のどうはを事あげハアニヤ又
妙身を幸あれども此はふほ也心あん人印戸砌るは鹿子等の先板の前
を補して妙身の誠の送殿の御り事慶院の生の事の碑を掌てじりて供
奉する所よ。

又いもく道塔を改名釋世を一字もたがひぬ写し其間に年曆一年を以
て之ひ多事のふ寔也而見を推考をよぶ万治二年かの妙身没後後
無紙
のを雄らそり三年に夏洋を綱宗大河ニ股の上に船をうちて更
わけらむ一事あれハ先に雄の道塔原も法名も石碑も行なき事無也
綱宗

絵二ツ

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

賊

ひがみ行路の條より徳居閑門縁舟らと万治三年の歴中日記より
レバ疑ひ多かるべく大綱宗の切害せき一を能う事を後年津らより造りて
貴賤りともせしふもよき道摺を碑をまつて河原に戒名を附せん
もいゝあれバ喜慶院より先の主難々清名碑世を因ひれども年号を
かりて万治二年十一月綱宗を葬られあまうて是をもぐちんせ
懲と万治三年とさうたまうすとおもみ舟を切害されやさればもくわ
きれども辭せぬの事より合せば是も十二月と記すもおもむね
轉善妙身と戒名せし方碑ハ綱宗の切害され一を能うて河原に之を安
代はる所あり

二字下

○巴人亭按其角みか一栗集ノ中

四字下

遊心寺ノ高雄カ庵

云々の石を孤山草の混

二字下

イ丸

六字下

按これ宋代の高雄あるや

云

○水代松西の松つむ眷膳ケンロク地神の宮たり人これ仙屋主尾の前也あくまより名

を埋め小祠をあら也
也故小女の孫切の影をかねて様を破ると云ひ此の事より
や玉久年自赤洋6近在内船の下役大橋をもとソム人正月元日ふ川きよ女首をもと
○去きの道折ふ主尾也と云ふ羽子板タタキとあり今も金櫻の代りとあざり古風
あり様様タツタツメル

巴人タチ二字上

二字下

三浦家傳説

高尾續扣故

二字下

初代

元吉系不知名

二字下

二代目

元吉系不知名

二字下

三代目

元吉系不知名

二字下

四代目

元吉系不知名

二字下

五代目

元吉系不知名

二字下

六代目

元吉系不知名

二字下

三字下

三浦尼翁上仕算の年記
宝曆八寅年

一は座候

ア

キ

高尾考補綴

社ニツ

月

日

月

年

月

年

月

年

あつぬわ語

寛永廿年

板本元吉原細記七丁

一ちんゑりん内

。いちす。たうを。あえ。さ用

江戸町

ツキ中裏

一高ちろ内

。もし。むりん。たうを。うや。いくた。やなき
。たんご。たのも。あけ。さりん

三

。たくみサ。うつま十六。くぬヒナケ。サ一
。クスハ十八。クツキ。十六

ち人のいもひよのせききのきみとハものなうれもあき四うぢよ
きりとよあうあわととくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
おりい三人のきみとよお一首とよも
みるふかきよのをさうをきききみの
きみをみるよ。四。日うも

京町

一わう三字う内

。もー。まうせ。たんじゆ。ヨラさ。たうを。大き

たゆふ。かくま十五

。ときもく。セキヤ。うめの介。ちゆの介

あらはおとこ

。うそく。うそく。あらはん。かうく。め天下一

か。ハキのもの。うそく。あらはのうちあん

。うそく。あらはのうそく。

一九うたう内

。そー。おとハ。ふちま。まうち。おとめ。ちゆ

。たゆふ。でハサ。うそく。サニ

ちゆふかとよく。うそく。あらはの介。きみが。さけう。うそく

。もひもく。おとく。あらはと。思ひつけ。一首

。おもひて。ハチまく。ふあらぬ。うそく。すけ
。うそく。ぬりを。うそく。きみ

絵二つ 一字誌

唐
吉原袖鏡
女郎評判記中から取る
一 た 田 ふ 二 宅
三十一人 七十五人
合計九百八十七人
二字下
吉原袖鏡
二字アキ
一 た 田 ふ 二 宅
三十一人 七十五人
合計九百八十七人
二字下
吉原袖鏡
二字アキ
一 た 田 ふ 二 宅
三十一人 七十五人
合計九百八十七人
二字下
吉原袖鏡
二字アキ
一 た 田 ふ 二 宅
三十一人 七十五人
合計九百八十七人

右うちおあ治一冊ハ寛永二十年板本元音系の細見記あり中か紙生え残致たセ
強あり弱あり新音系の町一丁目毛尾山毛板本もあらはれのもの也
江戸町
二字アキ
同書の五丁つづねともハモリや市のうきもあり
と云をゆくモ一女市ハ賄はとある
原下
一 おやぢ内 6 遊女の名男
二字アキ
かくのどくうおやぢと云ひ店の恩ちのが是名ときけに比思ひがとある
櫻子ふきをふよしバ寛承中元音系の廊よたをと云遊女ほんぢをそばへ女
市こぞあき小毛尾と云名妓行を四人追跡妓の名ふよびきいとくもる名ぬ
の毛尾はほんぞきもるあす下 京町
布左衛門毛左衛門毛左衛門毛と云遊女と云名を記さればうれり三浦
毛と云事あれどもととよたをとふ名ハ右に人のからむ一 寛承古年板本告
京大馬年み柳町の時より三浦が毛尾と名妓行とが等と云ふと云うきもる
同書のおもじよたの毛尾と云ふ

脚を改めてよし。¹⁴
吉原幕柄の紋を。此の紋を。かくちん。かくたら。腰刀。万治寛文延宝の年。の
吉尾¹⁴ 金紋を。けり。と。名。は。ま。いの紋を。つむ。ハ。ほ。のこも。
おほき。あり。す。び。袖船。年号。行。金車を。ひ。バ。伊達。吉尾。代。月。
うき。ふ。あ。え。吉尾。考の眼。ことを。もの。は。書く。

二字下

新吉原幕柄

元禄四年女帝評判

あさぢ。吉原角田川住人。都多

太夫之一 高雄 三浦内

今九一やう。あん。ゑん。がふ

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

13

15

16

17

万福んごよ。け。う。ご。あ。め。い。そ。と。く。み。ま。き。る。ね。く。ぐ。よ。一。書。か。お。ま。
第。二。と。一。と。を。巻。か。く。ら。ふ。書。一。そ。い。の。評。判。に。わ。名。を。と。う。な。す。ま。ざ。り。ふ。う。れ。
ば。ひ。と。た。松。よ。こ。の。さ。ハ。か。二。と。う。し。ま。き。と。と。ハ。書。一。ま。す。ん。せ。ん。を。く。の。う。の。
あ。く。も。ハ。う。れ。名。か。よ。し。今。新。十。王。て。う。す。る。を。と。く。み。ち。ま。の。う。り。よ。も。た。ま。す。こ。
う。も。兩。方。ふ。む。う。り。有。也。十。人。の。く。ち。を。聞。そ。の。中。の。六。人。の。く。ち。一。づ。く。ま。す。と。も。
い。評。と。ハ。あ。や。う。參。す。た。う。を。の。お。き。う。き。ん。の。法。も。は。ん。そ。を。今。代。く。ま。る。

二字下

三字下

太夫之一

高雄

三浦内

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

6 6 6

か。を。吉尾。と。中。行。き。ゆ。ふ。や。い。ふ。新。え。ん。海。ま。と。を。く。ら。け。あ。く。ある。わ。し。
 あ。と。あ。あ。九。が。せ。ん。四。の。言。を。か。一。雄。と。金。二。の。ゆ。を。の。ど。じ。い。き。あ。る。を。ハ。悪。人。
 を。も。善。人。と。き。く。て。極。あ。セ。う。う。う。み。を。の。れ。が。氣。う。う。う。も。も。と。ま。せ。い。人。を。も。悪。
 人。と。あ。ま。一。い。ま。よ。つ。み。ま。す。た。う。の。何。山。の。山。の。山。の。山。の。山。の。一。書。
 かる。あれ。ど。も。け。い。せ。い。つ。み。ま。ん。人。の。思。り。も。ま。せ。く。う。四。方。の。い。ゆ。の。お。も。く。ち。づ。
 し。あ。わ。れ。い。じ。ん。考。を。ま。の。オ。一。た。を。あ。う。れ。り。ん。を。ま。く。か。う。じ。や。山。も。さ。れ。を。ふ。
 く。う。ま。ま。ほ。と。書。が。ま。と。も。少。む。す。れ。あ。り。る。ふ。ま。い。教。う。あ。り。先。ま。だ。は。は。は。
 も。た。う。を。あ。く。き。や。こ。あ。あ。き。い。ま。た。を。と。と。う。ん。を。つ。ま。そ。ま。み。さ。り。や。
 え。ん。が。あ。ど。ハ。あ。う。ん。ち。び。う。う。う。り。九。ち。う。御。を。あ。あ。を。あ。あ。を。あ。う。う。う。う。う。
 し。先。ま。り。や。い。ま。旅。の。身。が。さ。す。な。京。あ。ま。の。ほ。と。ま。で。吉。旅。の。石。を。を。
 い。さ。と。ふ。お。房。を。あ。ふ。書。ち。う。き。を。ま。で。小。魚。ん。と。そ。よ。け。い。じ。の。ほ。き。た。う。を。

の名をあふきてや者無のものもあつてまづ御所のうちには
戸ねもむぎたうをあつもあつあいきゆく行ゆめのまけ心とけあらまうと
をこゝのふきをあら様ふみて三すのゑあをレとくまくふくさうと
の音無きのきくうとちもんもゆましにちくよあづもばくはくはくは
じ戸は在とほきのるもがときあまんをす尾がちぢくふくうとくのゑお
そくうとまきなにあつまレははははははははははははははははは
あるを能こそふきほとまのあうれふこの書つてまよしにまくばのを
ぢる我をぢるまレや内オハシのへあらやほきれもひきあらをりて
理を立きまのまくはレ十ゑんあきゆくまくはにまくまくは
う今もそんぬをうレさくうおゑんとひレ事をあげてよとにレははは
王つらを行ひる我を行きをすレといひくあらんレをあレ道レのまくよ
せふるのきくみレいざレさひレさひレそ内レ一たまレふりく人の少レさ
おをあらレはま十和レまをアニ神レいきんおもとぬまくまくまくまく

日経一

六

ことだがかりたるをかレきあレとレをあらまレせまわきう小むレさき
ふきもいまたうをレはきあれどそん神レこすみ四のうレひのとひのうちの
中たちレく御君レおすまあまレけレとレまつまレ日奉レの神レみせまのせレ
をりてあらじあきけふれレとろをあら行レふるこの書レよとるあれ
詳レとレ有レあレせきレみレとレ信レのむレあきら實レふたん體レふくまレと
え體レのくレあレせきレみレとレ信レのむレあきら實レふたん體レふくまレと
花レのまレの名レをつぐやほのまレとレをまレしをあら行レふくまレと
うレはよの人のまレふくらレ思レのまレとレをレまレたうをレふくまレあくまレあ
さレまレのあんまレ道理レつるまレあらきレまレくわんレあくまレをレまレたうをレほ
らレ書レせんまレりうレとレまレくちレをレまレたうをレまレせせんレ人レまレ度レのまレうレあがレ

一字下

九かあふうけい印レをいふうれなたうレ行レふる難レやあきめとレ

部多

坂

因

師

京町分

江戸市内一筋
八丁堀
八丁堀
西郷町
西郷町
八丁堀
八丁堀

作
者
繪師 石川流舟

筆者



書左如

行房
二十二字詰

19甲
四位

江戸本通油町

板本 佐藤四郎右衛門
相模屋太吉清

接ふ此細足根草を立冊モノ
上を脚て年号あれを出名
もあらば作者板元の名を考
亦ハ室永正徳の姓の細足之

接スルニ石川流舟ハ元禄二年
板江戸圖體の作者也此下に國
體の本ニアリニ同一同文浮世繪

三浦金之助
(三)ノ平トモ

ハ格の書字

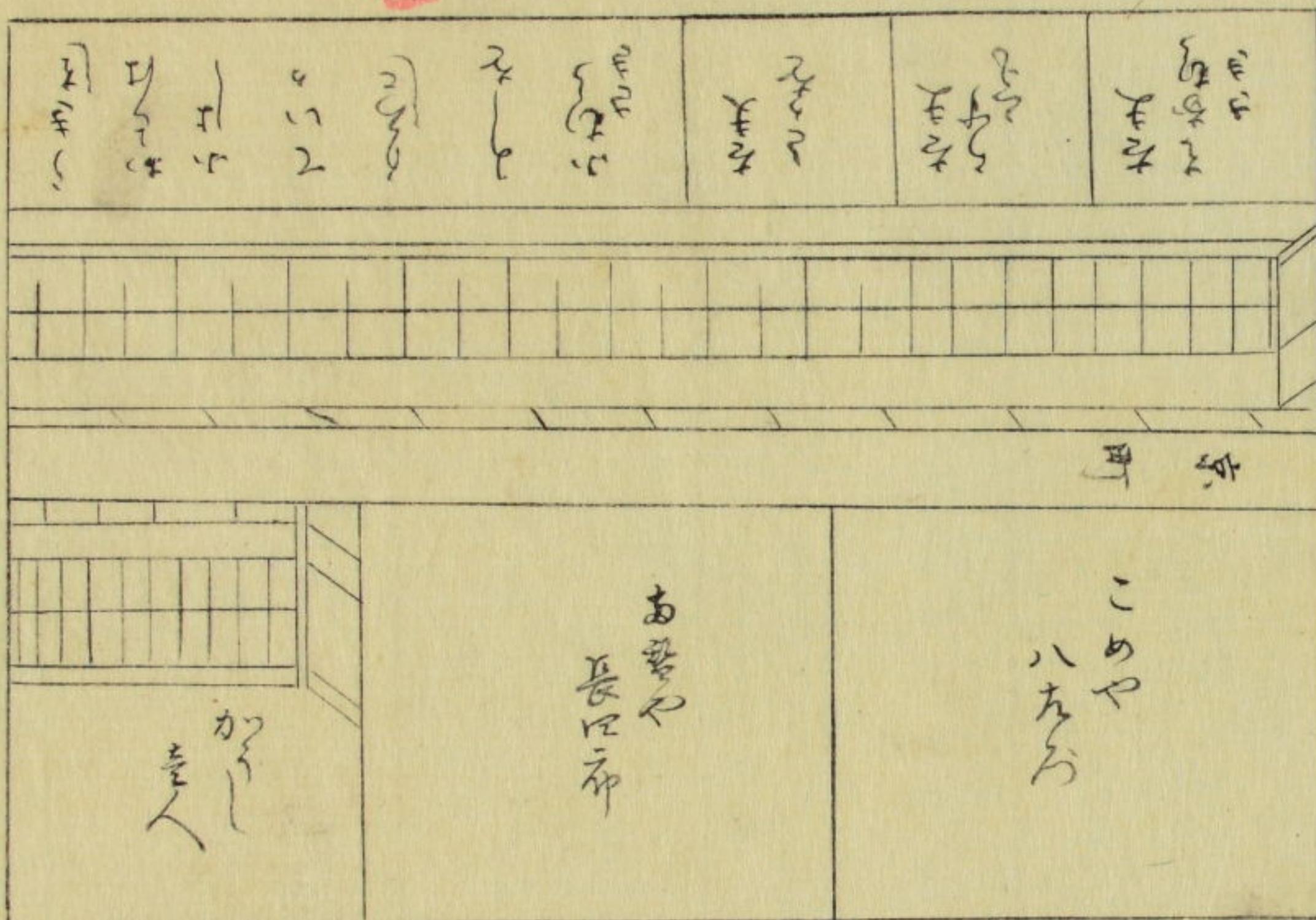
接スルニ石川流舟ハ元禄二年

板江戸圖體の作者也此下に國
體の本ニアリニ同一同文浮世繪
勝ノ款
浮世石川伊左衛門後之トアリ
是之

治海

一字語

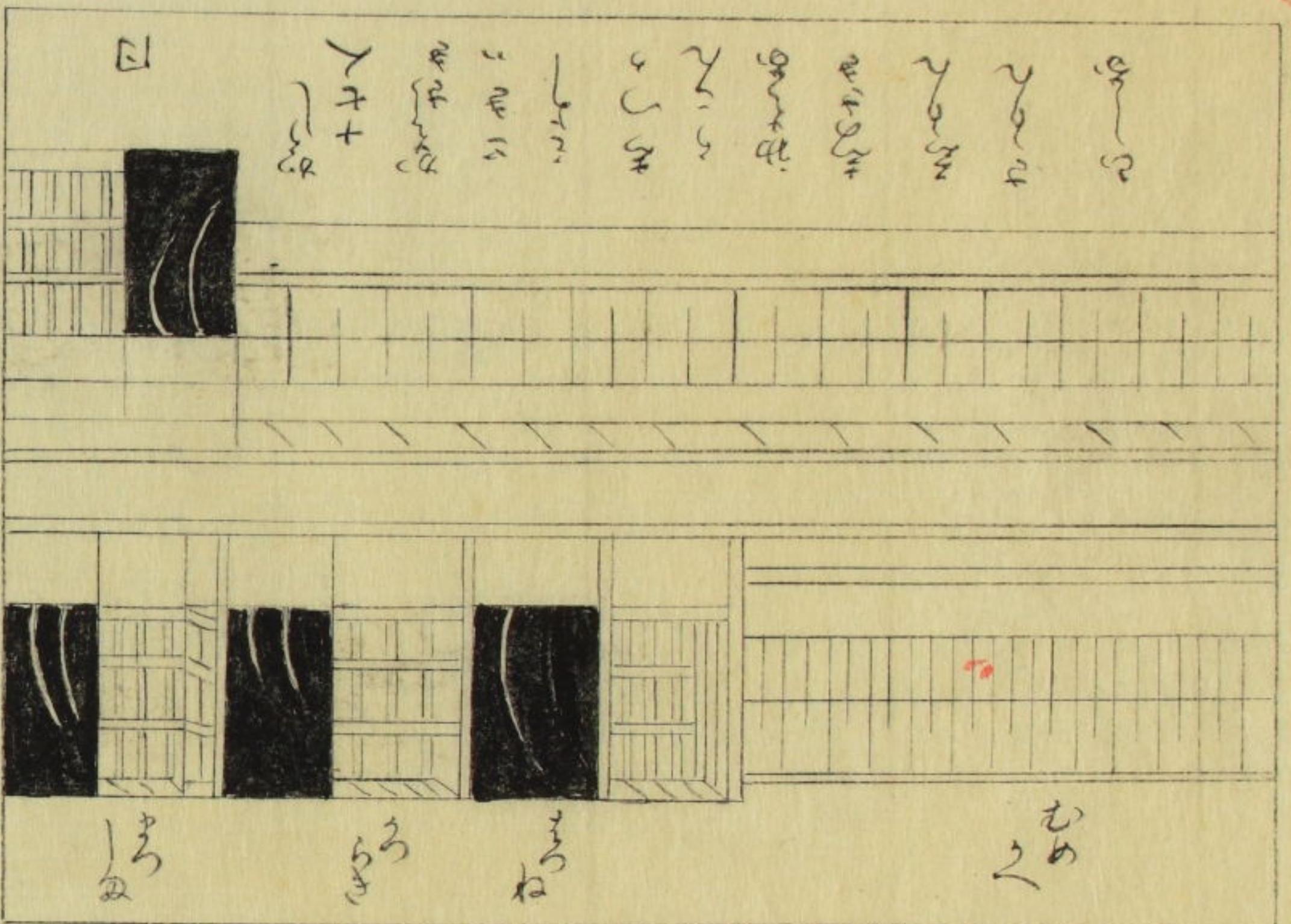
19 詞段一



右股説
三つ

右股説

22



江戸圖體奥書左ノ如し
石川流宣俊之
23
三行
右字説

右股説

24

吉原

五ノ二

車三	(三)	口	口	吉原
うちや みちのく	松葉	あから	せた	五ノ二

回 国 答

西

西		北	東	南
三	一	二	四	五
六	七	八	九	十
十一	十二	十三	十四	十五
十六	十七	十八	十九	二十
二十一	二十二	二十三	二十四	二十五
二十六	二十七	二十八	二十九	三十
三十一	三十二	三十三	三十四	三十五
三十六	三十七	三十八	三十九	四十
四十一	四十二	四十三	四十四	四十五
四十六	四十七	四十八	四十九	五十
五十一	五十二	五十三	五十四	五十五
五十六	五十七	五十八	五十九	六十
六十一	六十二	六十三	六十四	六十五
六十六	六十七	六十八	六十九	七十
七十一	七十二	七十三	七十四	七十五
七十六	七十七	七十八	七十九	八十
八十一	八十二	八十三	八十四	八十五
八十六	八十七	八十八	八十九	九十
九十一	九十二	九十三	九十四	九十五
九十六	九十七	九十八	九十九	一百

西回國答

上方板

西回國答
上 方 板

享保十五年

兩巴危言

25			
(小)	(大)	(内)	(外)
三浦屋布店の内			
小 あらわす うそとま	小 あらわす うそとま	大 小 あらわす うそとま	内 小 あらわす うそとま
竹 たけ の	竹 たけ の	竹 たけ の	竹 たけ の
新 しん 金	新 しん 金	新 しん 金	新 しん 金
乾 かん 金	乾 かん 金	乾 かん 金	乾 かん 金
新 しん 金入込	新 しん 金入込	新 しん 金入込	新 しん 金入込

26	27	28	29	30
招 まねき	吉 よし 支 手	あ が と	三 み く り	三 み く り
店 てん	店 てん	う き と	う き と	う き と
竹 たけ の				
新 しん 金				
乾 かん 金				
新 しん 金入込				

33

小 あらわす
うそとま

二 宇行

纹二ツ

享保十五年			
25		26	
(小)	(大)	(小)	(大)
三浦屋柳左衛門	25	26	27
あやめ元 うどみ	あはる あらわ	あやめ元 あらわ	あやめ元 あらわ
あさき日 あさき	あさき日 あさき	あさき日 あさき	あさき日 あさき
店賣持 竹の	持手 ほて	あがと あがと	あがと あがと
新金 あり	新金 あり	新金 あり	新金 あり
新金入込 まくせ	新金入込 まくせ	新金入込 まくせ	新金入込 まくせ
山の井 やまの	山の井 やまの	山の井 やまの	山の井 やまの
やまの	やまの	やまの	やまの
32	31	30	31

33

① 小文
一文書

二二行

纹二ウ

食 緒

回 回

上方板	
1	2
3	4
5	6
7	8
9	10
11	12
13	14
15	16
17	18
19	20
21	22
23	24
25	26
27	28
29	30
31	32
33	34
35	36
37	38
39	40
41	42
43	44
45	46
47	48
49	50
51	52
53	54
55	56
57	58
59	60
61	62
63	64
65	66
67	68
69	70
71	72
73	74
75	76
77	78
79	80
81	82
83	84
85	86
87	88
89	90
91	92
93	94
95	96
97	98
99	100

35-

今	かく	かく	かく
ちとくら	さく	さく	さく
大き	まき	まき	まき
へ	あ	あ	あ
あ	き	き	き
み	く	く	く
の	の	の	の
う	う	う	う
ま	ま	ま	ま
や	や	や	や



延喜四年板
横布

今	井	三浦	三浦
ちとくら	い	三浦	三浦
大き	い	三浦	三浦
へ	あ	三浦	三浦
あ	き	三浦	三浦
み	く	三浦	三浦
の	の	三浦	三浦
う	う	三浦	三浦
ま	ま	三浦	三浦
や	や	三浦	三浦

横布

享保十九
大傳馬町三丁目

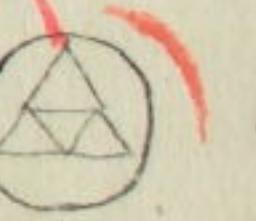
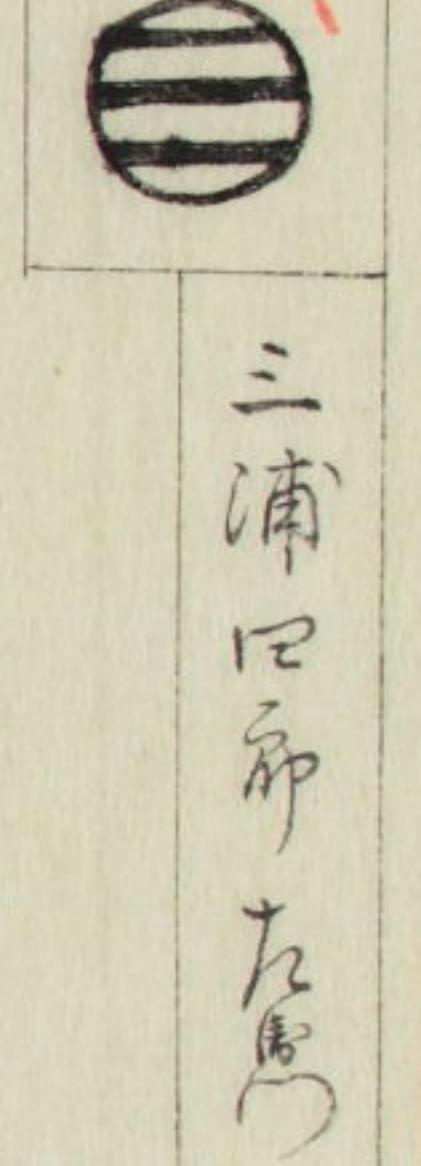
鶴御
青右衛板

34

延喜五年

里の家名記

奉書 嘉政 模年



屋戸一文誌

36

三浦四郎左衛門	さくらうざゑもん	さくらうざゑもん	口入セのひ
まきぬ	まきぬ	まきぬ	あつき
まきぬ	まきぬ	まきぬ	やくも
まきぬ	まきぬ	まきぬ	そめきぬ
まきぬ	まきぬ	まきぬ	やちよ
まきぬ	まきぬ	まきぬ	ここよ
まきぬ	まきぬ	まきぬ	やつて

38

文大三浦四郎左衛門	あつみさくらうざゑもん	あつみさくらうざゑもん	口入セのひ
先と	先と	先と	ひと
先と	先と	先と	あつき
先と	先と	先と	やくも
先と	先と	先と	そめきぬ
先と	先と	先と	やちよ
先と	先と	先と	ここよ
先と	先と	先と	やつて

まやふれく年号を考ふ

模年

九郎助

享保十九年正一位と左位アルト
アレハ享保十九年のほめ極く
案より文中の細考

延喜元年板

41

枝子	△	三浦口扇左鳥
△	枝子	三浦口扇左鳥

模本
模本
模本
模本

枝子	△	三浦口扇左鳥
△	枝子	三浦口扇左鳥

模本
模本
模本
模本

40

元文五年板

吉原細見

タテ小本

坂口

太
高尾

立
本

板
本

大傳子所三丁目

舞形町

源多喜

44

夫	太
高尾	高尾
立	立
本	本
大傳子所三丁目	吉原細見
舞形町	タテ小本
源多喜	

三浦四郎左衛門

紅葉行説

45



三浦四郎左衛門

立
本

日元セ

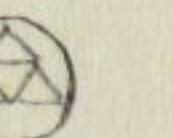
立
本

立	本
本	立
立	本
本	立
立	本

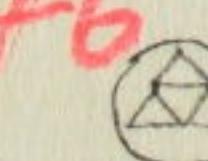
寛延二年板

立

本



46



立
本

二行詩

46

宝曆五

入相元

三浦尾田節左衛門	
△あけまき	△あけまき
△ここよ	△ここよ
△とめきぬ	△とめきぬ
△あけまき	△あけまき
△ここよ	△ここよ
△とめきぬ	△とめきぬ
△あけまき	△あけまき
△ここよ	△ここよ
△とめきぬ	△とめきぬ

47

宝曆四

三浦尾田節左衛門

三浦尾田節左衛門	
△みゆ	△あくま
△むち	△あくま
△わらう	△まく
△をひ	△まく
△あくま	△あくま
△むち	△あくま
△わらう	△まく
△をひ	△まく

横車

山車九左衛門

49

(山)

△大傳弓削
△山車九左衛門
△三丁目

四字下

万治高尾の考

浅量章三谷月光らと度院へ余が友栗の菩提寺ちあるより余対便まみて高尾の墓碑に開ひてよきれりと書記はどい傳伝わざうそを左の如ゆかとす

也

万治の以三浦の家宅ニ官町の所付高尾病害伏して家宅付ヶ
富富者者も常念佛唱て彼の宅付く間の高尾病害伏付てつは
一一ちせ延念仙あきえそれ身身がりあがれ度念仙あきえふ善善
き事事とひきと万治二年十一月五日彼の宅付家付方方アリム先東東之
浦浦の善程善不付匪匪あれど彼が送云ようてまくら代代富富者者の善善
尾尾を連連波波の善善仙仙庵庵の魚魚とソハ妻妻説説り仙仙庵庵の善善
尾尾を連連波波の善善のものものに病病をうきぬぬふ善善を方方付付し付ぬと
まづさうひ傳傳する者者の説説也也善善四方増増てお極極念念入入る
墓墓ありとと四五五年年考考想想善善地地地形形を草草てあままの所所を高尾比

下

石碑碑もまくらくどうけあづふ下下の石碑碑これ考考ふ善善
も伊豆度度の命命をうけて死死り三浦がか近善善ふ念念を今今も

べづびと酒酒らをを

ト

○又三谷町ふりんく住住ぬ文七七と少光の涼三谷町の三浦を庵庵と
まわされいむむ三浦の家宅家宅呼呼りあり度度小小あし池池空空くある
の捨捨れれああふををあれあれど形形ををははくくいいる

○伊豆度度の方方文七七善善が出生出生生の地地の信信州州郡郡蘭宿宿ありとと親族親族

今今よ跡跡をかかめめすす友友ののととおこうこうすす万治度度の傳傳

書書りううれを異異は

是是考考ことを今今ととばば度度傳傳ももああううもうう涼涼の梅梅ををあれど

貞享四年秋度度度子子ニ代代の高尾病病とうて死死いたるるををだだ三三

かかくくれれて伊豆度度のの死死ととよよすす多多役役あるある明明あり

四字下

○太深高尾考

は戸主の砂年帖
寛延年
大寺馬町丁目模町に高尾九郎左衛門と子孫
を身上よく
家風をもたらす事大勢より深め
親
少うきをもつて諸風を達
美男也
家業を手も事の因ひ捨びを
もちらうと三浦のち尾ふく御
ほのかよしの外の客ハ詰深むる
こせ笑ふされど
は家風をは
臺もろい高
は例
せん
あらわる
にま歸つての解
門扇をたのみて系女ノ京の町家
船岡を大も門扇の振ふをも
身をほ
いふあらわる
本研究二四
にま歸つての解
門扇をたのみて系女ノ京の町家
船岡を大も門扇の振ふをも
身をほ
いふあらわる
本研究二四
にま歸つての解
門扇をたのみて系女ノ京の町家
船岡を大も門扇の振ふをも
身をほ
いふあらわる
本研究二四

四字下

人語りき

○柳原高尾考
式部太輔令

泡影記云
自元禄元年至延享

寛保元年柳原式部太輔令

四字下

四字下

四字下

四字下

四字下

四字下

四字下

身請遊女高尾而出淫廊日作大門内外干盛而行粧華美
也士跡來而迎于宅松平和泉守松平左衛門佐爲侍受而
祝之宴于焉

トル

新吉原五十間小田原又多周とよりの三浦の遠縁のもの

柳原式

貴重抱の字尾

傾城

年季内

我娘の上質

字下

尾の方傳御文を今ふやむ余波にて写しうぬみのと

事

身請御文

未

候

等

字下

清風古ノ内故ハ承じ被

松代令若

我娘の上質

實也右之字尾諸親類

たゞも妙生多御やうなひ善若

夫婦

おもと

右の女子金子御百萬

お附衣類の所具

一

や公儀様

度

被

仰

通

我娘の上質

儀や召あひ

物

ハ

序下

料理屋筋道中もとをも

遊女高尾

かね

かね

かね

かね

かね

かね

かね

序下

三字下
中ノ事ニ有る者右格ノ如ニ居重ひ
御公儀様作上位もあつてまなみ海之女貴婦又納出幕
被可有假物二久兵衛

寛保元年酉六月丁

放置

久兵衛久兵衛莫也松丸町西丁目

世貞主世貞主二字又

楊名町利家宅

六〇

四郎左衛門二字又清人清六〇

九字上

一字下
按少十代因高尾十九次の時方うけむと云说ハ非ありニテ高尾享
保二年壬辰とあう七年をて寛保元年六月宮柳京庵の別號よりと云即
其町人の名号也身清セモと見えシ

享和三年秋九月

京傳記

右高尾考補續ハ山東京傳の持リて伊藤重房の書也

二字下
筠庭按少嚴秘錄小は時清出アキラケ尾ハ幸所居にす身清セモニニ津山寺の門番花叟
六三軒と云者の大ありと惟ニ翁のみ清り多モ也

二字下
新吉原京町丁目

四字下
三浦屋四郎左衛門抱遊女高尾系譜

高尾一宇又
寛永頃三人之郎

初代高尾後尼とあつて日本堤西方ち守中にを結ひ一生佛仕念佛

此初音とあり法号傳譽妙心修女と号

字風子もろくも庵紅葉うぶ

皆句を吟詠人ノ高尾三日庚午正月廿九身まつまぬこの

塔河楓

樹木を植え高尾と号を石井高尾と號

高尾二字又
二代高尾と号を石井高尾と號

全登世あそことあん石井と号をは近江國志根の城主井伊掃部

頭高彦家活石井吉多^{タチツル}元政と云人二男^{トメ}大和新家と直^{タマ}仕へ侍^{サムライ}が珍奇
簾絵の達^{タチ}よして側近^{サムライ}侍^{サムライ}軍士九名うちも始めて江戸の侍^{サムライ}を下

至るを事も^{アシ}の侍^{サムライ}の侍^{サムライ}北朝ふ京皇^{カミ}は君をむくと一取

或任廊

の枕をそぞり~~せよ~~^けまというあるあひせれ等つらひよおひし志^シ事^{アツ}
ニ取^{サム}を三取^{サム}とすも枕^{シタマ}も初^ハのすもそ極^{マツシテ}てそ年^ハもやられ四^{シテ}年^ハ
^春の妻^{アシカ}もすこゆも面^ハありて二月の候^ハも袖^ハかわえん三月の花^ハも穂^ハ
らぬ心^ハきにされと詠^ハめ作^ハへとあん袖^ハや羽^ハをあらすじも枝^ハをつめ
ひ葉^ハももふく甲斐^ハ、ねの脚^ハあきをの歲^ハの桜^ハ桔梗^ハ万年^ハの生^ハも
うたうはあひうれ川^ハの流^ハみの方に生^ハへうれうちも里^ハのふもふ
らひありて或人の身活^ハきん事^ハを定^ハ生^ハを定^ハ尾^ハもすせぬうれうち鶯^ハ
きを音^ハう方^ハはす一章^ハおこううればいとせんうとあくおふちくのみ
そ今宵^ハおきの音^ハと音尾^ハもすふやうりて考^ハ林^ハみれ夏^ハのさむ
旅^ハ方^ハあくたぐひふゆ^ハ事^ハもありてゆ^ハ告^ハきのうじめ^ハの空^ハ詠^ハふ詠^ハを
うちもううりそどきひく^ハまききき^ハの日^ハのまよ君^ハ直^ハ春^ハの和^ハ歌^ハの季^ハと
ほの好^ハ手集^ハをき音^ハうれき度^ハよか^ハうで音^ハうみ竹^ハさよ^ハ音^ハううと
やま尾^ハ、許^ハうううりく一章^ハの四^ハ章^ハふ^ハ事^ハの山^ハ品^ハ今^ハゆうよひのれ

とおひりかうたり船^ハうらうとふ思^ハの仰^ハきもむ奇^ハのうれいと^ハ半^ハばうぎ
ねばさんとあく思^ハいとどまうみを紹^ハモ^ア別^ハうりに漸^ハく會^ハ終^ハうとあるが
詠^ハふゆくにある音^ハうれもあこ退^ハとちくふ亟^ハの國^ハ鶴^ハの空^ハ章^ハ小^ハ明^ハと
や仰^ハもともき破^ハの門^ハあ千^ハのほりるればせど^ハたにわ思^ハひのやもともあく
灯^ハの歌^ハを^ハ夏^ハの室^ハいのこれ思^ハひをそめてぞ仰^ハるふおふふ門^ハとく^ハ
わ鶴^ハあ^ハと回^ハ射^ハ弓^ハ字^ハ二^ハ人^ハあくとまも^ハのなき^ハうとぞ宣^ハのちとある者
鳥^ハが^ハ歌^ハもとく^ハあく^ハ思^ハひ^ハえ作^ハうい^ハ頬^ハのそひ^ハきやまうと櫻^ハ承^ハ
まうの宗^ハやればいと^ハ天^ハとくとあると^ハこさうをもやうれど^ハそれべと
やもも^ハ歌^ハもゑの^ハ歌^ハとくとあると^ハお思^ハひともあふ^ハうれび^ハや
怪^ハみうらうと直^ハあふ^ハとび^ハとび^ハおうあうとおきま^ハおうき^ハを^ハうれび^ハや
よ^ハうき^ハゆううき^ハうの^ハうき^ハうき^ハおうあうとおきま^ハおうき^ハを^ハうれび^ハや
比^ハうう思^ハいど^ハがをまうび^ハとけくの^ハあんば時^ハもうる^ハうだかあふけ^ハの
直^ハ者^ハを^ハ聞^ハを^ハ詠^ハひを^ハ歌^ハの^ハ歌^ハ甚^ハ音^ハ難^ハ哉^ハあん^ハ少^ハ若^ハり^ハと

保彦もあいかへ是より又めのれ方か手ては枕をて病ひを苦で
そひ枕を路ひぬ者多御か^レ歳とそ序より少被を出奉ふ風を切て早堤
をもきぬ漸く引ほの疊音^{音信}便^レ扬をれ在在^レ所^レ今ふ^レ今田町^レ玉^王
小年うねに因うみかむひ坐て走き^レとよりも又^レ三浦よりゆまそ^レこそひ
とあく^レせりと亭を^レめてうきとる亭をゆうじゆ房^レあと^レゆう
まのむく^レまく^レまく^レふく^レまく^レまく^レ女房ゆまて^レ尾が^レ因害のうを^レ語^レる者^兵
物おもきいの^レ詁^レあんそ女房を伴ひ^レ三浦やふ年^レて^レ尾が^レあより吉^{イマハ}
産屬年うたり行^レと^レかくともやうりと^レまなたく^レやうれ^レま尾^レ終焉の息も
あえ^レ音^レ屬^レが^レ語^レを^レけ眼うち^レかき吉多属^レの聲を^レ見知^レて^レゆく^レと
そ^レ火の酒^レを^レす^レあふは^レ吉多属^レも^レと^レゆく^レと^レあ^レけ^レと^レを^レゆく^レと
色^レハ書^レを^レと^レ封^レし^レば^レま^レう^レち^レよ^レお^レと^レお^レき^レは^レふ吉多属^レと^レゆく^レも^レち^レ
ひ^レか^レか^レ思^レみ^レゆ^レの^レ身^レ活^レゆ^レ小吉多属^レと^レゆく^レも^レち^レ
ま^レ吉多属^レと^レゆく^レた^レん^レと^レむ^レか^レ死^レと^レ西^レの^レを^レと^レゆく^レと^レゆく^レと^レ

や^レ野^レま^レを^レま^レま^レて^レま^レも^レゆ^レり^レひ^レ死^レと^レ裸^レらん^レそ^レか^レく^レそ^レ思^レ
き^レあ^レれ^レお^レき^レ後^レを^レ忘^レれ^レも^レ泣^レひ^レも^レ後^レ世^レを^レお^レや^レん^レあ^レと^レな^レ
や^レ寝^レい^レて^レお^レれ^レぞ^レま^レ居^レう^レみ^レう^レた^レ枕^レの^レう^レち^レ小^レ黄^レ金^レの^レゆ^レき^レま^レな^レ
そ^レま^レま^レ尾^レか^レ善^レ枕^レと^レお^レを^レ厚^レう^レ我^レま^レう^レい^レ法^レの^レか^レも^レあ^レだ^レ那^レき^レの^レ煙^レ
ふ^レま^レぐ^レま^レよ^レ襟^レい^レき^レゆ^レと^レつ^レて^レ痛^レひ^レの^レ枕^レま^レと^レ門^レ道^レり^レま^レふ^レ卯^レ月^レ
も^レも^レま^レま^レ衣^レ相^レふ^レゆ^レ体^レと^レな^レば^レか^レう^レ衣^レの^レそ^レま^レ移^レも^レと^レ花^レ深^レ心^レ
ほ^レふ^レに^レ所^レま^レう^レま^レま^レ衣^レ相^レふ^レ也^レ道^レを^レぐ^レら^レる^レお^レひ^レ近^レが^レま^レは^レの^レ
歌^レを^レも^レき^レ歌^レを^レ路^レも^レき^レば^レう^レも^レう^レそ^レび^レと^レは^レま^レの^レ里^レふ^レ山^レを^レ路^レび^レ馬^レ
を^レも^レき^レ元^レ政^レ法^レと^レ名^レ法^レ集^レの^レ行^レ者^レと^レな^レぬ^レ二^レ十^レ歲^レも^レち^レ方^レ延^レ
道^レの^レ記^レま^レの^レ初^レ行^レ集^レの^レ名^レを^レ政^レ道^レ德^レ論^レの^レ意^レを^レあ^レい^レま^レ尾^レを^レ

高尾^レ6^代同^レ高尾^レと^レ是^レと^レ西^レ余^レ尾^レと^レ云^レ

全盛葉越えたりは君の時都之りの事とい名異事あり今ふ廟名小林姓と云
アキモト一月ある秋の月アソムトと云を寄附する送る起けふ尾は益
モ酒の事也政也京の吉野より東京の吉野を支世方へアソムトとモテおうりを
持てて岐阜へ正道也ふ吉野もさりのあいを抑へ可申可申モテ尾が方へヤハル大
坂の多國ふ食ひをたのミ多ふ通りとのを従く多ニキ也國も食ひをとおく
ヨリのをそて多尾ふもどり生スモおうねーと吉野モテタリバサヘ聖モ
サセモ多尾へモモシロシトモアシニ急急をま新町の聖金國アラミバテ西条の号の本御三丁目南
側寺子を辯駁て端の同角も内原範の内用を西条吉多萬と云ひゆく御く訓深
て済ふ事とあり兼輪ヒツリ不別業行、多尾ハ別業ふ徑行とあん吉多萬内
用金の事を三色すすり金主万あを傍も後新川道明方を又主万直を傍三年
の事を済一弓がモ付年哥の仰事をとて證文の裏ふ居れば後ふ公事小及
び吉多萬が罪遁そ事あくモ往ふおひて仕事行うとやうは多尾もせん
あく辛頃妻とあらじと櫻事ハ何んの多尾ふもどてハ笑ひてと云

高尾

四代目高尾と号を高田多尾と云

鳴田主二郎と云す者有源くあり少りや中將綱村釣兵もは君ふ室五
度ものをうきしらむふ島田のみきはをえく意承志とがもざくられも
綱村釣兵は右丈彦雲にあくあくみ身清して三谷坂より舟も汝海
の底あふむえまう仙毫ふりて一子をすすけぬすりよは君綱村久あふえ
まうにて船かつて白刃よかよて矛やくら或ハ雪のあくも政也一承代橋
北にあくふ多尾四作と神ふかありありと世人の少へりやうと承代橋
の多尾少郎の實の多尾豫園有也山城國多尾の術を承る事のよう
たびひか一からぬ後も家臣至田甲斐と云ひ加羅のち詔の事をとけ
活きんとて佐芝所も往來修りとおもづめ一家を勧めて我工ふせんと
のほり事あらひ居ひまふ岐田は君ふおまくおあつてちゆの透哲と御じ
事もあらひて死ある多尾うそともをすちふ英美りけふあとづくのまぢ
ぬ後ハ考ふゆゆ御代室多尾西念もそゑを清きふ英美多尾う為す

七家一色の二代目高尾と云ひ石井吉左衛門をうつるあらん今般と
みせんとちかく社の作者是を含むんりの

~~方~~

高尾一字早五代目高尾と号す詔ほ高尾と云

許田おもうち池駄深野の妻とあり一生を過

~~けむ~~

全額ありと云ふと世ふる傳へ事もまう

~~本~~

高尾一字早六代目高尾と号すお高尾と云

夫君あぐれぬふくらむ思ひとめらぬのみ有本や子をお仕へ多うと云ふ

~~けむ~~

をばゆゆふあひて崩ハシあひて年月をそよて何人の事と承き多のひを

~~本~~

もみあねぐ

高尾一字早七代目高尾と号すお高尾と云

この君足の持高尾とあん古令領城の足袋を用ひてよしは天原と

~~本~~

と今ふ云傳

○高尾一字早八代目高尾と云

トル

○高尾一字早九代目高尾

トル

○高尾一字早十代目高尾と号す柳原高尾と云

え文ノトヤ

此君の令堂世ふるよ之式部を妻と云ひ高尾ふくらをかけて夕晴

て播磨の玉田路通行間とあん堵の御法世間へあさくあもんくぞ

きこえり流は遠の輕軽の如義宗の世間もめし祐祐やもんまで遠く

その越路ふくらくらとあん次君のあやハ源川津津の門番花塗花塗と云

もせばよしらが氏氏もくもくの傳傳といもん越路の雪雪も安く凌て寛政

十年八十四歳歳にて世間を去りまくらえみゆゆはすうさとくの草木耶鄭の草

花の祝祝よりは呈呈せむぞくありあり

高尾一字早十一代目高尾

か
た

考ふ心ゆて假城あるとくうけの黒ものうちよしむとめでと
古井

けを

宝刀

高尾 **かね** 山之御山也 実延の以

抑 神か尾山ニ御とひかすすの端家ありもとあむの以テ三浦か尾なれ
う齋とあらじとそ時御きと物と小室と又名を號ひてこらを故今ふお
ひとおま名ふ其ては家のちまれとほ旦ニ浦のあり故ともあらうれ
ば此の今ま齋のちまみす かづり傳へくよしとひ尾の名を傳ぐ
しむいきまづりさんそほをあひくまの沙汰もありうるをあら

比 **人** あんとそく

馬 村上氏某

蘿 宗洋

三 上

五 字下

教 文化元歲次甲子仲冬トサニ

和 日

恩 傳写

五 字下

勤 元治十九年四十二没方近死りハ實文仲のと

國 田

捨 捨身の因もさみずれのことより

五 字下

勤 德

國 田

捨 捨身の因もさみずれのことより

三 字下

勤 文化六年春草軒

方 國門

得 爭写

二 字上

生 字上

舉 翅草館

二 字上

唐 花園

二 字上

三 字下

勤 日

國 庭

捨 幸

生 字上

一 序

聖の耳遠この一矢を携め嘉つて而は序文を乞ひ且彼人と行はうの
内方此事をくづまうとひて解日所ハ彼内方ともきもぬがく
そ故ハ三世ニシテ白道とひて仕事の解うれと尾懺悔の段とひ
ふう紀まとかく内方とひてかの客ををう捨てあらびの森の鳥の葉の
帽を會ひ(云々)又鬼つてひとは惡性のちとも何うば鬼つらの彼曲

高尾考追加

楓 比 落 葉

方の事あまびさればうせん爲め彼の方へはきくしを三ツ股の
みづとひあくほどかきうじあをそればかのうかの
人の事心うちのをもて歎場をひもうとそつづきふ
もの人の事ハいもくもあくさん之を必あまもと竹と雪の
まひきをやう一星を穿たんとほねのくふとハレやくらる
ありと云へてやう星を吊りぬのを聞かずともうとよぐこ聲
文化のものやもせな風地里景陽人のかの國也

上字

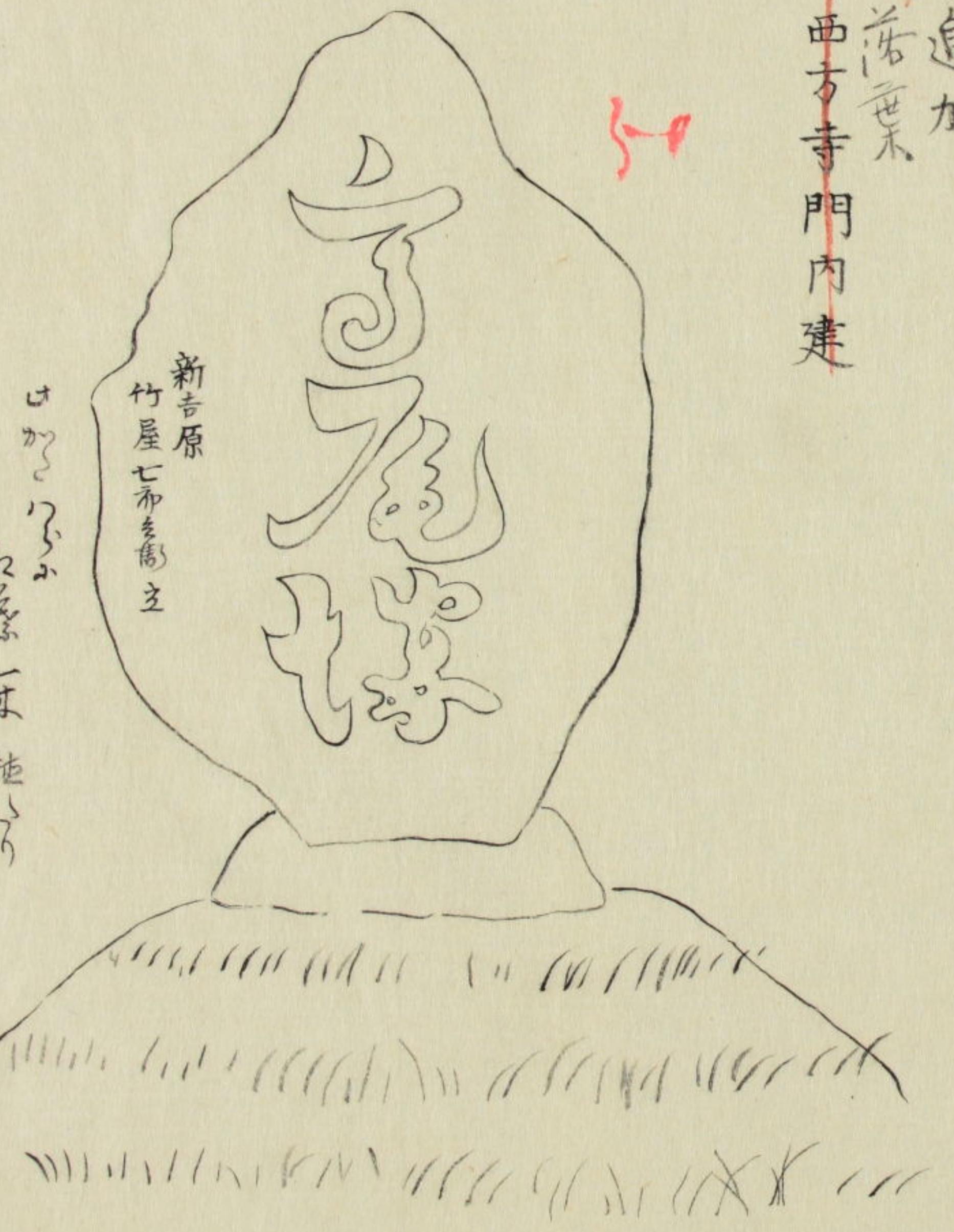
三字下

ア

ト

表

50



図二並べ太木を木にアノ仕

素。重。と。一段。又。詰。み。子
二千

殿

宇下

別

高尾

考

追

加

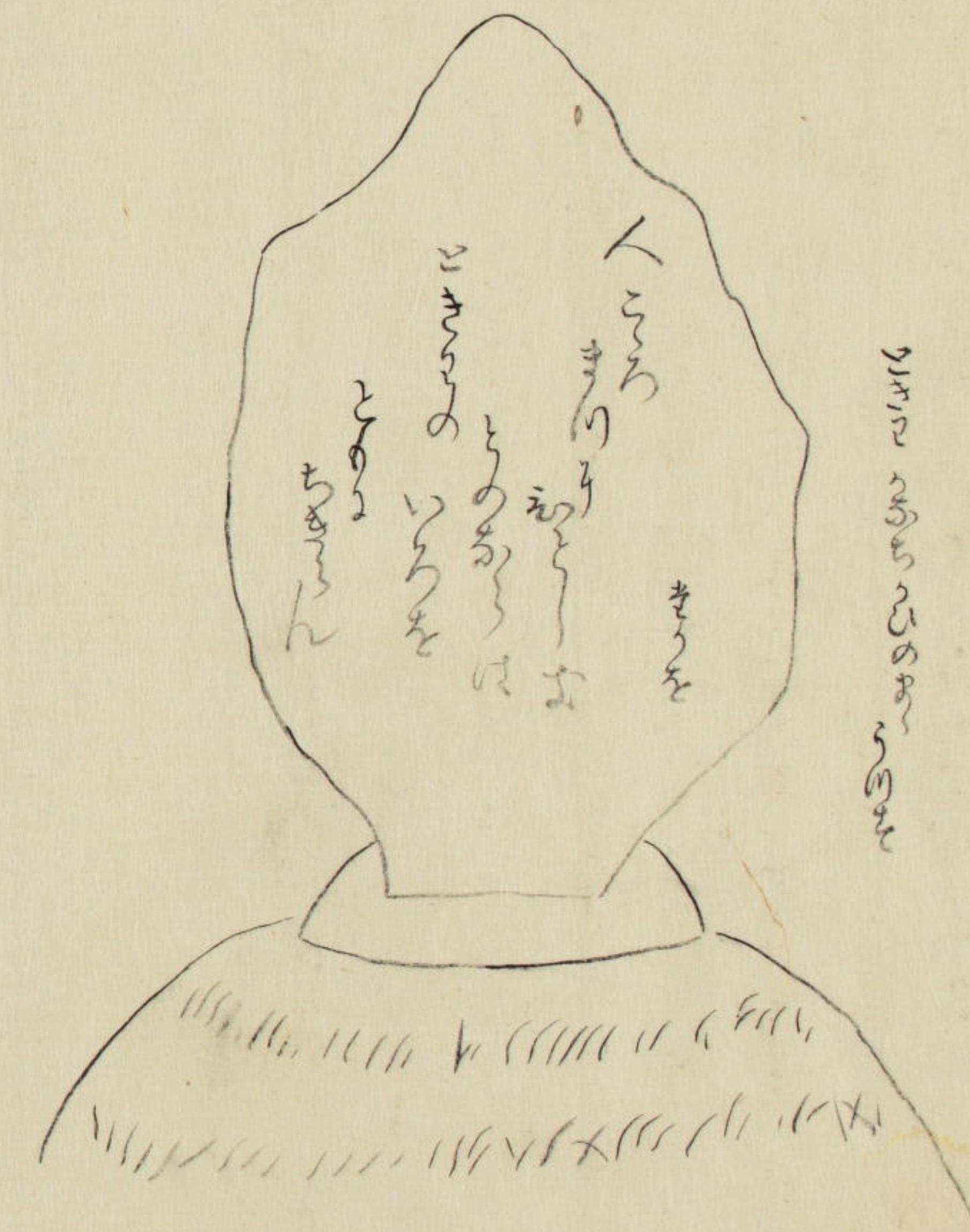
楓の

落葉木

引領山西方寺門内建

裏

51



文化六己巳年百五十四ニ值リシトテ五月廿九日ニ五越レ佐吉ヲ塔婆

の施主池田を母

池田を母ハお住富の
施主吉木若狭

旅館也

寺住院ふを尋ねて尋尾の戒名を埋めてこの塚を建ヒと云春

度度

度度

度度

度度

度度

度度

度度

度度

と書書

と書書

と書書

と書書

と書書

夫より春度度院ヨリ尋ねて尋尾の戒名を埋めて塔を建ヒと云春

度度

度度

度度

度度

度度

度度

度度

度度

語語きよトモ又文京傳子の尋ね一時の言葉言葉もあらば此ふ墨

度度

別行

日のあつぎのうちにこれば道傍小行こぢまとあらひあるとあれば
こう百五十四のあたりは竹尾七手馬と云ふの主屋塚を築て碑を
建ててその主屋塚といふと號す。あつてこたびかく塚を立ましと号す。林者
れの主屋がさうものうちある。されども三浦の主屋主屋石五十四の時ハ道
傍塚を建立す。主屋主屋は一あくあり。主屋主屋方よりう
こたび塚を立す事ハ名無ふあるはうれ先花の本家を立す
ありとせき高めうるし。あわぬのか。也。うもくうもくう
し事と思ひて塚を立ぐのほどと尋ね。おのきに丁あり
角之を立す。

又左馬云仙巻彦主屋病中。主屋の時三浦方。あせりてちくぶゆ
ノキがまをつき。御院を主屋に駕籠のゆも主屋恩疏
あまく。これを左馬。主屋。と。う。主屋の時大病のゆ。あれば方
活金の所持する事。左馬。仙巻彦主屋。角力。主屋。の。か。殿。や

かと三浦方。金子三色。包。被下候。
ハ是源ありともづやき。封。村。を。き。よ。て。入。られ。巴。黄。金。を。有。政
大かまく。が。右の内。あり。左馬。主屋。主屋。の。御。と。と。そ。と。う。や。も
砌める。す。ま。ふ。今。ふ。道。背。の。方。ハ。主。屋。に。れ。よ。と。あ。も。向。を。ま
づ。主。屋。の。方。ハ。人。の。あ。ま。よ。ふ。御。主。屋。の。方。ハ。ま。よ。と。あ。ま。よ。う。放。す。と
津りま。

主屋三種を死せ。と。い。ま。傳。同。ぞ。と。笠。部。本。屋。と。い。ま。よ。う。や。し
は。者。を。三。浦。は。而。な。ん。る。主。屋。と。二。浦。お。那。波。は。飯。田。町。む。ち。の。本。坂
小。浦。波。の。宗。直。也。主。屋。五。日。以。前。主。屋。う。ち。に。主。屋。八。景。あり。し。と。同。町
治。谷。氏。の。話。あり。

案。主屋。但。屋。屋。切。害。を。く。れ。す。世。ふ。ひ。傳。す。も。バ。モ。ト。を。す。の
傳。す。か。ま。十。根。考。ふ。主。屋。之。段。舟。の。中。を。仙。巻。彦。主。屋。の。た。ま。の。本。坂
モ。と。原。死。せ。を。三。浦。方。を。廢。活。せ。う。ど。も。す。か。と。十二。月。上。り。て。死。せ

しあう下 辞せの句 十月 よおとまちと時を一すまの思ひもきもれでれ
八十日ひの底おりりひ葉ドジヌアモニ 旦吉^{慶院} 菩提小僧^{あら} 万面塔
の墓にすり古代のものとて古の御船の無所とひ成多の在たかの輪日
輪を廻り塔の左右の表す蓮^蓮をあらたまどうより御望^{みゆ}すと見よけ
く道指を墓を建つもう後何^{いつ}ま^{慶院} が年を暮すいあとあれば
轉塔めおの為也と仰せられ是を推量すこれめお菩提のあ後
立御事^{たち}も一 年号月日も道指の方よりうやく取る時道指の方
年號てあるもさうらざまくふ万治二年を二年十一月廿六日を立と
きづわらむ辞せの句も塔の角の西^西を指すとくにいもやもりを
れば塔の角のを^はくと考^{たと}えど考^{たと}え方を立とむハ實^{じつ}と
事^{こと}

文化己巳十月の中比十日行

文 宗 七

トナリ

一 宅 右に碑^ひ少^{すこ}り^{すこ}すれることの筆をえらひりそまの内後^{うし}近也
下 捷^はまもとふ愚捷^はまもと他々所^そ免^{めん}都^とひま^ま也

一 行 丁^ひ

仙^{せん}基^き高尾^{たかお}

初代高尾

傳^{つた}譽^よ妙順^{みょうじゆ}

板本=三浦金^{きん}内^{うち}二代目^{だいに}高尾^{たかお}万治三年傳^伝
譽^よ妙^{めう}心^{こころ}持^も持^もか^か下^げ山^{さん}寺^{てら}院^{いん}西^{にし}方^が

寺俗^{じふつ}=土の道指^{みち}と云^いす

桜^{さくら}二法名ハ如因妙身^{めうじん}ある

仙基^{せんき}高尾^{たかお}と云^いハ能く人の名不あれバ僧^{そう}ハ波^{なみ}を但^{ただ}今ふよ上のうを流
せぬもあらずあらて承^{うけ}代^{だい}橋川^{はし}もあへ左の橋^はよ高尾大師^{だいし}にて獨^{ひとり}上
の歌^{うた}をかうとて女の拂^ほ笄^{いり}のまぬ^ぬとくの^の後^{あと}中^{なか}の三^{さん}段^{だん}
最^{さい}も^もす^す爲^{ため}金^{きん}セーといを此の説^べとて實^{じつ}亭中^{ちゆう}その^{その}事^{こと}

上^{じょう}尾^お
二^に代^{だい}目^め高尾^{たかお}

四ナ下

四ナ下

紀藩⁶五百石^最上吉左衛門根引て是を⁶上吉左尾とせふ

水谷⁶左尾

三代目高尾

左衛門

根

左衛門

前後

水府侯為智用達⁶水谷⁶左尾⁶根引⁶て其の後⁶多聞⁶内平⁶左⁶辻⁶前後⁶
のより⁶三み多⁶ト⁶て出奔⁶されり⁶作田⁶多⁶び⁶モ⁶多⁶聞⁶の事⁶あり⁶ま⁶ま⁶
深⁶雪⁶と角⁶て⁶こ⁶る⁶後⁶牧野⁶越⁶の度⁶へ⁶妻⁶が⁶死⁶て⁶氣⁶無⁶き⁶又⁶小性⁶平⁶
馬⁶と密⁶通⁶ひ⁶ま⁶を⁶走⁶り⁶水⁶川⁶八⁶幡⁶の生業⁶板⁶紙⁶を⁶あ⁶ら⁶す⁶事⁶と⁶
あり⁶それ⁶も⁶俳優⁶者⁶袖⁶國⁶政⁶の⁶ゆ⁶方⁶へ⁶そ⁶う⁶今⁶を⁶政⁶も⁶即⁶が⁶婦⁶夷⁶と⁶娘⁶の⁶の⁶事⁶と⁶
後⁶如何⁶あり⁶や⁶の⁶時⁶水⁶谷⁶大⁶喜⁶音⁶も⁶手⁶通⁶金⁶を⁶乞⁶う⁶金⁶の⁶事⁶と⁶
之⁶外⁶死⁶を⁶これ⁶を⁶水⁶谷⁶左⁶尾⁶と⁶す

一 極⁶古⁶緒⁶も⁶事⁶と⁶人⁶と⁶ハ⁶ひ⁶ほ⁶け⁶く⁶あ⁶と⁶況⁶や⁶絶⁶城⁶修⁶の⁶あ⁶ら⁶
を⁶も⁶あ⁶く⁶ぞ⁶行⁶下⁶さ⁶ど⁶情⁶を⁶表⁶す⁶と⁶う⁶ち⁶か⁶見⁶め⁶き⁶む⁶
を⁶り⁶く⁶ハ⁶遊⁶君⁶の⁶極⁶も⁶き⁶き⁶腕⁶も⁶方⁶治⁶の⁶左⁶尾⁶ハ⁶死⁶き⁶よ⁶く⁶死⁶ね⁶
幅⁶ミ⁶水⁶谷⁶左⁶尾⁶ハ⁶游⁶泥⁶ふ⁶例⁶も⁶の⁶名⁶を⁶紹⁶モ⁶ん⁶を⁶あ⁶く⁶べ⁶て⁶如⁶此⁶

一 天地懸隔の⁶遠⁶いぢ⁶も⁶と⁶か

四代目高尾

水谷⁶左尾

五代目高尾

水谷⁶左尾

六代目高尾

水谷⁶左尾

越後の⁶度⁶に⁶ま⁶く⁶被⁶國⁶隱⁶度⁶お⁶は⁶死⁶ぬ⁶左⁶尾⁶と⁶云⁶

七代目高尾

行柱りきや又年の限限を廊中を離れずも傍邊に築地席を置
へ小屋を却て世の浮刹はうせきといふ也してちばはは
家尾いえおと云

下室一或説ふ之の比の施主家尾いえおや上か
青様せいじょうの家尾いえおをとあるとあらゆる者とあら人
内方うちがたとんが世よの出でたたる者とあるとあら人よの有ある者とあるとあら人よの有ある
下しも家尾いえおを思おもせせとと今いまの御靈ごりやうより家尾いえおが取とりありし是を
内方うちがたと終しゆしあるよ

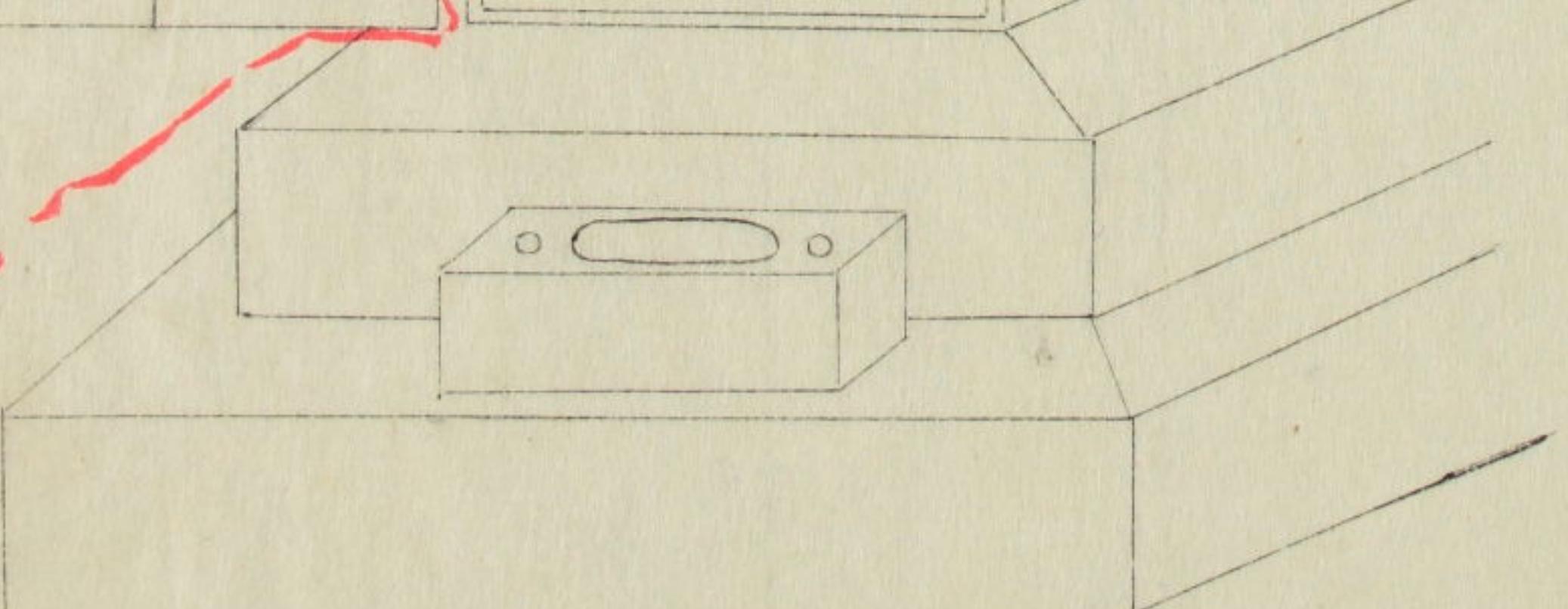
一四一

一四二

三十二字語
十三行ううの内

享保元丙申年	妙法淨林院妙讚日晴大姉	十一月二十五日
楣原常之助源範清		
義母迷修行年		
七十七歳而當之		

千時正徳五年二月廿九日



仙臺荒町法花日蓮宗

法龍山佛眼寺ニ墓アリ

藩中近衆目附役

松原進太夫六百石余モト千石也
直ニ分地ニテ六百石す也

高尾高雄改ム七八ニテ死ス

小塚善六三百石

高尾高雄善八跡所ニ書數百枚尺ニテアリ

三字下

二字下

二字下

二字下

秋の方

燕澤善應寺和尚ウケ書シテおほねの事ト云フ

三浦を二代上巻新莊小ナニ二代玄尾あり

ノル

奥州はふ工藤平助女真葛撫曰むゝ國主たうをとゞ桂女をこぐねふう
そくもすそちゆ赤ひて御飯をもめいのききぞ中洲川よ
てゆ赤はくはく赤とせ赤の赤人思いもあらぬ赤景けいはうたよろ赤
おりうく事こと修しゆあややがよのよ如おくありしも也
玄尾げんハまうゆ錦にしきふききつつあらら後ご志しを取とりり志しをを
ててくくいいのの番ばん士し相あい立たて又また新しんちちと代かるる名なもも
六百石今日付役役をつとも重じゆ年ねん則そのまえ只ただ野の氏し流りゆ沢さわ解かい云い只ただ野の氏し
者もの奥おく葛くずの良よ人ひと之の実じつ作つくりたたる鏡かがみののあきあきものもの

于時明治十九年下秋

筆者

車木賴德



